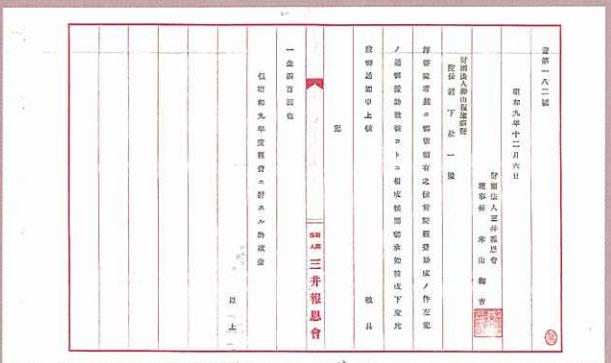
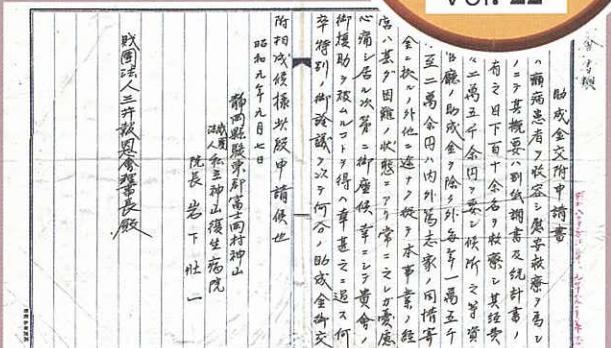


米山梅吉記念館 飯館報

2013
(平成25年)

秋

Vol. 22



(左) 国の登録有形文化財になっている復生記念館 (右) 昭和9年に提出された助成金交付申請書と交附書（復生記念館蔵）

富士山を仰ぎ見る静岡県御殿場市神山にある復生病院の由来は、パリ外国宣教会の司祭テストウイド神父が、伝道の途中でらい患者に出会ったことに端を発する。神父は明治19年、鮎沢村（現御殿場市新橋）に家屋を借りて6人の患者さんを収容してお世話を始めた。やがて明治22年神山の地に移り、我が国第一号の私立のハンセン病療養所として開設された。公立のハンセン病院が出来たのは明治42年、渋沢栄一、大隈重信ら財官民がひとつになって「らい予防法」が公布されたのが明治40年3月、そして国立の療養所第一号の長島愛生園ができたのが昭和5年のことであるから、私立の復生病院がいかに早く設立されたかを知ることができる。

昭和9年3月に三井報恩会が設立され、米山は初代理事長に就任する。この年の9月には当時の復生病院院长岩下壯一により、助成金交付申請書が提出されている。厳密には県村役場を経由しての申請であった。これに対し、昭和9年12月6日付けで三井報恩会から400円の交付がなされている。この時の患者数は112名だった。そして、米山が理事長を務めている10年の間、三井報恩会から復生病院へ継続して支援が行われている。（15頁参照）

現在、明治30年に建設され、長年病院事務所として使用されていた建物が「復生記念館」として開設されている。この建物は2006年、国の登録有形文化財に登録された。ここでは、ガラスの写真版、文書、治療具、患者さんの生活品、フィルム等、創立以来の貴重な品々を展示している。



公益財団法人 米山梅吉記念館



館報第22号発行に際して

理事長 渡邊脩助

全国のロータリアンの皆さん、残暑お見舞い申し上げます。

今年の夏も、また猛暑です。7月末の中国地方を襲った猛烈な雨に、気象庁が「これまでに経験したことのないような大雨」と警告を発しました。山口県萩市では、1時間の雨量が138.5ミリに達した、30ミリでも「バケツをひっくり返したような雨」だそうですので、その4~5倍の激しい雨でした。この警報に対しては「命を守る行動を直ちにとて下さい」と報道され、まず身の安全の確保が第一です。このような異常気象がどんどん激しく多くなって来ています。地球温暖化の兆候でしょうか。災害にあわれた皆さんに、心からお見舞い申し上げます。

この6月、カンボジア・プノンペンで開かれたユネスコの世界遺産委員会において、ついに富士山が世界文化遺産に登録されました。富士山信仰を育み、文学や浮世絵など多くの作品にとりあげられてきた富士山は、信仰の対象かつ芸術の源泉であることから、文化遺産として世界に認められました。当記念館屋上から仰ぎ見る富士山の姿は、いつ見ても美しく、雄雄しく、素晴らしい感動しています。我が第2620地区(静岡・山梨)にとりまして、富士山は地区の中心に位置したシンボルであり、宝の山あります。文化遺産登録は我々にとって大いなる喜びであり、誇りであります。永年にわたり地区社会奉仕活動委員会が、「富士山の美化」をテーマに奉仕活動(清掃・植樹・草刈・粗大ごみ除去等)が報われた思いで、これからも継続しなければなりません。また富士山からの大きな恵を受けております。それは「水」です。富士山一帯に降った雨や雪解け水が、地中で火山灰土壤で濾過されて伏流水となり、数十年から百年の長き年月を経て、富士山一帯で地表に湧き出しています。「白糸の滝」「忍野八海」と無数にあ

ります。当記念館の周辺にも柿田川湧水があり、1日に100万トンもの地下水が砂を巻き上げて湧き出しております。三島市にも多数の湧水公園があり、その湧水を使って一週間洗浄し、泥を吐かせた「三島のうなぎ」は有名です。江戸時代からの老舗は今も盛業中です。

日本から30年ぶりの国際ロータリー会長のR I国際大会が、ポルトガルの首都、「平和の港」と呼ばれるリスボンで6月23日~26日に開催されました。くしくも田中作次R I会長が掲げたR Iテーマは、「奉仕を通じて平和を」。ロータリアンは、この一年間、田中氏の呼びかけに応じ、さまざまな角度から平和について考え、そして平和を実現する活動を続けてきました。その年度を締めくくるに相応しい「平和の港」リスボンでの国際大会は、まさにその集大成と位置づけられ、プログラムの全てに「平和」というキーワードが盛り込まれました。

平和のシンボルであるポルトガルを象徴するオリーブの木の側で「私は、皆さんと一緒に、奉仕を通じて平和を」を祝えることに大きな誇りを感じます」と締めくくりました。立派に有終の美を飾ることが出来ました。ご苦労様でした。心から感謝申し上げます。

当記念館は全国ロータリアンからのご支援によって、管理・運営されております。日本のロータリー関係では唯一のロータリアンによるロータリーの施設です。日本のウォリングフォードともいべき聖地です。

是非、日本のロータリアンでしたら一度はご訪問下さい。そして屋上から雄大な美しい世界文化遺産・富士山を眺め、「三島のうなぎ」をご賞味下さい。そして米山精神、ロータリーの心を学んで頂きたいと思っております。



春季例祭

- 日時 2013年4月27日(土)
- 会場 (財)米山梅吉記念館ホール
- 例祭及び墓参
- 例祭式典
- 記念講演
 - 演題 「資生堂の社会貢献と東京ロータリークラブの職業奉仕」
 - 講師 弦間明氏
(東京RC (株)資生堂特別顧問)
- アトラクション
 - ロータリー財団山静学友会メンバーによる演奏
ソプラノ 中村香織
ピアノ 廣瀬美鈴
- 懇親会

記念講演

資生堂の社会貢献と東京ロータリークラブの職業奉仕

弦間 明 (東京RC (株)資生堂特別顧問)



資生堂の弦間でございます。私は、1934年山梨県現在の笛吹市に生まれ小中高時代を山梨で過ごしました。その後、東京の大学に進学し、1959年資生堂に入社しました。資生堂では国内営

業部門を中心にキャリアを積み、1982年~1987年までイタリアの責任者として活動し、1997年からは社長として経営に携わり、会社を率いて参りました。また、1992年、専務の時代に東京RCに入会し、ロータリーの奉仕活動に参加して参りました。

入会以来、営利企業と社会奉仕団体という、一見

性質の違う2つの組織に身をおいておりますが、企業人としての活動とその経験を生かした社会貢献活動は、矛盾することはなかったように感じます。そればかりか、常に「会社」と「社会」を一直線のものとして考える機会をもつことができ、経営者としての見識を高めることができました。現在は特別顧問という立場で、会社のことを客観的な立場で見、広い視野で深く考える局面も出て参りました。

企業人としての活動が、ロータリアンとしての活動と齟齬を生じなかった理由の根源には、資生堂の会社の歴史と企業理念があると考えています。当社は1872年、東京銀座で日本初の洋風調剤薬局として開業しました。創業者福原有信は、千葉県出身。漢

春季例祭



陸前高田市にできたチャイルド・ケアハウス「あゆっこ」の前で

うでなければ社会の公器として筋の通つたものにならないことであり、ここが皆様にお伝えしたい最も大切なところです。

私自身は、取締役会のメンバーになったころから、会社の成り立ちや使命について深く考えるようになりました。これまでの延長線上ではなく、社会との共生、社会貢献が企業のサステナビリティの鍵であると考えざるを得なかったのです。

そのような社会貢献活動を意識したときに、企業人としてどのような社会奉仕ができるかを考えたことが、ロータリー入会のきっかけとなりました。諸先輩から教えていただいたクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕は、まさに私の問題意識と重なるところがありました。会員相互の人間関係によって高められるクラブ奉仕、地域社会の一員としての社会奉仕、グローバル化に対応する国際奉仕は「人間を相手に」「銀座の一員として」「世界に向かって」事業を展開してきた私の企業人としての経験と重なるものでした。また仕事の経験を用いて、社会からの要請に応える職業奉仕ができればすばらしいことである、と考えたのです。

私が東京RC会長を務めた1年間、「奉仕の理想と実践で新たなよろこびと愛を」というテーマで活動してまいりました。この活動テーマに基づき①東京RC創立100周年に向けたチャレンジ100構想②水野正人地区ガバナー支援③会員の増強④米山奨学会の支援強化を重点事項としました。①では東日本大震災への復興支援を最優先としました。特に被災地における母子支援「東北すぐすぐプロジェクト」を構想し、陸前高田市にチャイルドケアハウスを建設し、活用していただいております。②では、インターナショナルミーティング参加や地区大会全員登録を行いました。③では、期中の入会者25名を記録し、会員数をキープいたしました。④では2012年度、普通寄附金、特別寄附金合わせて1千万円を拠出しました。

東京RCの成果の要因は、多様な人材力、広く深い組織力、固有の文化力、卓越した技術力、豊富な資金力の5つが融合し、全員一丸で大きなパワーを生んだところにあると思います。そして、これらの活動を通じて私自身が学んだことは、絶えざる革新が歴史・伝統・文化・精神・道徳を創ること、多様性の融和が組織体質を強靭にすること、大きな夢への挑戦が、組織の成長・発展・進化をもたらすことでした。振り返ると、卓話の後、会長としてコメントを

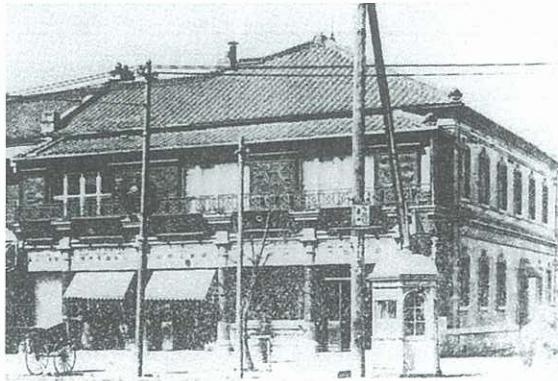
述べるのは、経営者時代にはない学びと緊張があり、チャイルドケアハウスの建設と広報活動では、会員の皆さんそれぞれの職業のエキスパートとして奉仕されたことに、職業奉仕の新たな喜びを実感しました。

企業での活動とロータリーの活動についてお話ししてきましたが、企業の社会貢献活動もロータリーの職業奉仕活動も、世のため人のために行動・貢献することであり、樹木に例えれば根っこは一緒です。近年の企業経営においては、経営者は非常に高いレベルの倫理的責任を負い、それを組織内に浸透させることを要求されておりますが、その経験もロータリーで重んじられる規律の遵守に役立たせることが出来るのではないかと考えます。このように考えると、私のロータリーでの活動も、これまでに企業人として獲得してきたものを、素晴らしいネットワークの中でさらに拡大、奉仕する個人としての循環活動といえるかもしれません。

20余りのロータリアンとしての活動を通じ、ささやかではありますが奉仕に努めてきたつもりです。しかし、活動を通じて自分自身が得た人間形成というメリットに比べれば、これからもっと多くのものを社会にお返ししなければならないと考えています。日本社会を取り巻く状況は少しづつ、時には劇的変化することが予想されます。そうするとロータリーが行う奉仕活動への期待や役割はますます高まる同時に、ロータリアンのやり甲斐、生き甲斐も増す一方ではないかと考えるのであります。これからは、東京RCの会長として経験したことを見分に生かしながら、一員として世のため人のために役立つ、美しく価値ある活動をして参りたいと思っております。

春季例祭

方医を父に持ち、東大医学部の前身である大学東校を経て、海軍病院の薬局長を務めます。明治維新以降、西洋調剤の粗悪品が法外な値段で出回ったことを憂い、海軍を辞し銀座で開業します。開業からしばらくは経営状態は芳しくありませんでした。しか



明治39年頃の資生堂（『銀座と資生堂』より）

し有信は、人々の生活を豊かにし、健康に奉仕するという信念を貫きます。有信にとって、事業は金儲けではなく、公益を増進するための営みであり、その永続性のために、お客様に多くの価値を提供し、次の活動の原資となる適正な利潤を生み続ける。会社はまさに「社会の公器」であると考えていました。

資生堂の社名は中国古典の四書五経の易經の一節「至哉坤元、万物資生」に由来します。「地の徳は何と優れていることか、万物はこれを元に生まれる」という意味です。この社名自体に、イノベーションをし続ける会社であるということを内在させています。この遺志を継いだのが有信の三男、信三です。彼は資生堂のビジネスドメインを、薬から化粧品にシフトしました。1897年、西洋薬学の処方に基づく「オイデルミン」を発売。薬と化粧品で「人々の美と健康に奉仕する」という今まで続く企業理念が明確になります。信三是その優れた美的感覚で意匠部を設立。資生堂スタイルと呼ばれる宣伝広告や商品デザインを行います。また、資本と経営を分離し、資生堂薬局を株式会社化し、初代社長に就任します。そして、マーケティングを学んだ松本昇を三越から招きます。松本はチェインストア制度を1923年に創設。1937年には、愛用者



1897年に発売された
オイデルミン（複製）
（『銀座と資生堂』より）

を組織化する花椿会制度を発足。製造・販売から消費者までを結び、メーカーの輪に入れるビジネスモデルを完成させます。このボランタリーチェインシステムは、メーカー、販売会社、小売店とお客様の連鎖関係を築き、相互の共存共栄を図るものでした。また、ブランドは世界に通用するものでなければならない、というグローバル思考は、当社を形作る重要な遺伝子です。

資生堂五大主義は、「品質本位主義」「共存共栄主義」「消費者主義」「堅実主義」「徳義尊重主義」の5つからなります。1989年、この五大主義の精神を引き継ぎつつ、新たな企業理念を発表します。「私たちは、多くの人々との出会いを通して、新しく深みのある価値を発見し、美しい生活文化を創造します」というものです。この理念を元に、社員一人ひとりがどのような活動を通じて企業理念を実現していくのかを明確にしています。

現在、当社が行っている美の社会貢献活動は、①女性・化粧②文化③環境の3つが中心となります。①では「化粧ボランティア」を推進し、高齢者や障がい者施設訪問などを行っています。化粧の心理的効用が実証され、化粧療法へのご要望は高まってまいりました。おしゃれをする、アクセサリーをつける、など社交的な行為は、人間の気持ちを高揚させ、表情を明るくします。化粧する人の皮膚を通じて、心と身体のネットワークを整える効果があり、化粧を通じての社会貢献であると考えます。また、女性研究者へのサポートもしています。

文化支援では、1919年に資生堂ギャラリーの前身である陳列場を開設いたしました。90年以上の歴史の中で5千人以上の芸術家が3千回以上の展覧会を開いてきました。関東大震災、昭和恐慌、太平洋戦争など経営危機を乗り越え、現在まで継続しています。さらに現代美術を中心に演劇やダンスなど様々な表現活動に対する協賛を行っています。

環境対策としては、レフィル商品発売促進、容器、外装の見直し、CO₂排出量削減にむけ、太陽光発電の導入など。また、生物多様性の保全の取り組みなども行っています。

昨今のように激動する時代に、企業は迅速に対応しなければなりませんし、自己革新性は大変重要です。しかし、企業理念、経営哲学は経営の基軸であり、不变であるべきです。すべての企業は、「社会に何を残せるか」という創業理念から続いているので、そ

青山学院を支えた人々

青山学院では、年に4回学報を発行されています。この学報では現在の学院活動の様子や活躍されている卒業生のお話など、様々な記事が掲載されています。このなかで「青山学院の歴史を支えた人々」として、青山学院にゆかりの人々が紹介されています。最新号244号（2013 Summer）において青山学院大学名誉教授氣賀健生先生が、米山梅吉について執筆されています。氣賀先生は1927年東京生まれ。1940年青山学院中学部入学、1949年同（旧制）専門学校卒業後、1952年（旧制）東京大学文学部西洋史学科卒業。戦前から青山学院に関わり、長くその歴史と共に歩んでこられました。米山が若いころに出会った本多庸一とその影響、社会の宝物である子供達の初等教育に力を注いだ原点が語られています。ここにその一部をご紹介いたします。

青山学院第六代院長阿部義宗はキリスト教主義学校に於ける初等教育が殊の外重要であることを、常々考えていたが、1933（昭和8）年院長に就任早々小学校・幼稚園の設立を計画し始めた。彼は云う「今日は上に伸びる大学よりも、下に深く掘り下げて根底から築き上げてゆく初等教育の方がより急務と信じます。言うまでもなく、眞の教育は根底から始めるのが大切であります。されば学院の急務は幼稚園を設け、小学校を建て、幼児に基督教々育を徹底させるにありましょう。かくしてこそ、青山学院の主義や精神を骨髓とせる人物が始めて現れてくるのであります。」そして日本メソジスト教会監督となつて青山学院を去る1939（昭和14）年に当たつて、莞爾としてこう語ったという。「私が院長として青山学院に残した最大のものは小学校と幼稚園ありました。」

青山学院のキリスト教主義教育に対する阿部のこのような理念と方針は、彼の尊敬してやまなかつた第二代院長本多庸一の「希わくは神の恵により我輩の学校よりは所謂Man（人物）を出さしめよ」という祈りを受け継いだものであつたと言えるであろう。

ところでこのような阿部院長の祈りを財政的に支え、初等教育機関の設立実現を、昭和12年という早い時期に、急速に具体化した人物こそ、校友米山梅吉であり、初等教育の重要性を理解していた米山梅吉は、財政面の援助のみならず、この計画そのものに“精魂を打ち込んだ”のであつた。

計画では、小学校を青山学院のキャンパス内に創設し、その建設費用約60万円は一切米山梅吉の寄贈によるというのであったが、宗教学校である青山学院が小学校を直接経営することは、当時文部省当局の許可を得ることが困難であると思われたので、青山学院財団とは別個に「青山学院小学財団」をつくってこれを経営することとし、校名は「青山学院緑岡小学校」としたのである。法規上は青山学院院長阿部義宗が設立者となり、青山学院財団より土地を借り受け、設立費用一切は米山梅吉が設立者に寄付するという形式をとっていた。然し事実上は青山学院緑岡小学校は青山学院の小学校であり、米山梅吉が精魂を捧げた小学校であった。

事実米山梅吉はこの緑岡小学校の開校の前年（昭和11年）に、その生涯をかけた三井信託の会長を辞任し、昭和12年は、日本ロータリークラブ会長と、三井報恩会理事長という、自ら書いた「新隠居論」に相応しい公益活動に積極的にとり組んでいたのであるが、更にここにまたひとつ新しく、緑岡小学校の校長として桜花爛漫の校庭で新入生とその保護者達の前に立って開校式の挨拶をしたのであった。即ち学童に対しては、●言語服装礼儀を正しくすること●人に迷惑をかけないこと●嘘をつかないこと●人にされて嬉しかったことを人にもすることを懇々と語り、保護者達に向かっては、学校の全費用は完成するまで全部自分が引受けさせて戴くから、学校後援会とか、保護者の後援団体などは一切必要ない、と経済的保証をした上で、「生

徒の教育は学校が責任を以て行うから、学校にすべてをお任せ下さい」と、学校・教師と保護者との信頼関係を強調したのであった。即ち保護者は学校を信頼して子供の教育を託す、学校はその信頼に応えて責任を以て生徒達を立派な人間に育てる、という「教育を信じて子供を託す」「信託の精神」である。この“信託の精神”こそ、米山梅吉が生涯を通じて歩み通した“奉

仕の生活”を支えていたものであった。信託とは「人を信じて託す」ことであり、相手を信用して物ごとを託す、相手は信用されたから責任を以て任務（つとめ）を果すということで、信託の精神のうちに流れているものは公益の精神であり、これこそ米山梅吉が生涯をかけて歩み通した“奉仕の精神”に他ならなかった。



斎藤實記念館を訪問して

佐 藤 剛 (水沢 R C)

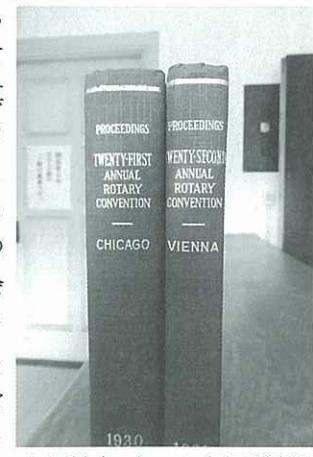


私が所属するRID2520地区では、1977年から短期青少年交換事業を行って参りました。これまでに、アメリカはオクラホマ州(宮城)とテキサス州(岩手)の若者を受け入れ、日本との文化交流をおこなってきました。地元の人や日本の同世代の若者との交流など、短い期間ではありますが、中身の濃い活動が継続されてきました。残念ながら2011年の東日本大震災以降中断していましたが、RID2520地区の短期青少年の受入れが、2013年から再開する事が出来ました。宮城県にはオクラホマチーム、岩手県にはテキサスチーム8名(団長夫妻と男子4名女子2名)が6月12日から26日までの日程で来日し、ホームステイをしながら日本の自然、歴史、習慣、食事等を学び、大いに楽しんで祖国に帰りました。

6月20日の午前中はグループ行動がなかったので、奥州市内の武家屋敷を案内しました。その後、私も副会長を拝命している斎藤實顕彰会の理事会があったので、顔出しを兼ねて斎藤實記念館を訪問しました。斎藤實氏は1858年現水沢市生まれ。幼い頃から英才の誉れ高く、近くに住んでいた一つ年上の後藤新平と山崎為徳とで水沢の三秀才とよばれていました。15歳で上京。苦学して海軍兵学寮に入り、日清戦争時には武官・少佐として明治天皇に仕え、海軍大臣も歴任します。1919年、原敬(岩手出身初の総理大臣)内閣に任命されて朝鮮総督に就任。1932年には内閣総理大臣になりますが、1936年、226事件で凶弾に倒れます。東京R Cの名誉会員にもなっており、ポール・ハリス来日時には、米山さんと共に歓迎会にも参加しています。また、夫人のお名前が春子さんといい、米山夫人と同じであること、そして故郷を愛した斎藤氏の雅号が水沢にちなんだ「皋水」、米山さんも故郷長泉にちなんだ「藍壺」という雅号を



斎藤 實 氏



シカゴ大会、ウィーン大会の議事録

使っていたことにも、不思議なご縁を感じます。記念館は、斎藤氏が水沢に建設した住宅と書庫、それに展示館を加えて、昭和50年10月にオープンしています。

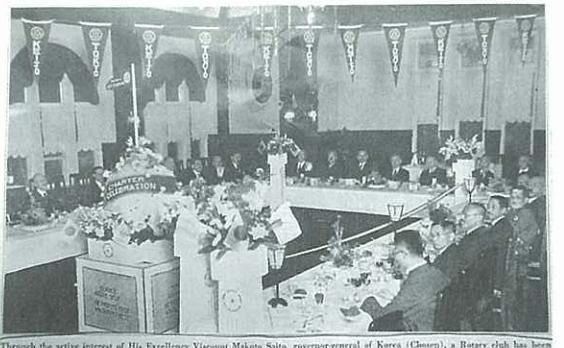
記念館では理事会の真最中でしたが、理事の方々も斎藤さんとロータリーの関係は御存知なので、皆さん笑顔で迎えて下さいました。この席上、短期交換で来ているナターシャさんとマリッサさんを紹介し、理事会は続行となりました。佐々木館長さんは、十分な対応が出来ない事を詫びながらも「二階の書庫に英語の本もたくさんあるので、覗いていっては如何ですか?」とお誘いくださいり、軍艦の階段を模した狭く急な階段を上って二階へ行きました。そして英語の蔵書コーナーに行くと、すぐにナターシャさんが「ロータリーと書いてある本がありますよ。」と申すではありませんか。驚いてそこを見たのですが、書庫の暗さに加え、眼鏡を車中に置いてきてしまった為、判読不能でした。しかし、確かににやらROTARYの文字は確認出来ました。午後、学生達に着物を着せて写真を撮影する楽しいイベントがありましたが、順番までしばらく時間が掛る事から、再度斎藤記念館を3人で訪問しました。館長さんに書庫の鍵を開けて2冊の本を出して頂き、事務室で確認すると驚くなられ。それは、1930年のシカゴ国際大会、1931年のウイーン国際大会の公式議事録でした。そこには、米山さんが寄せた文章、徳川さんのスピーチが素晴らしい事、また当時の全ての地区ガバナーの写真等、往時を偲ぶ記述と写真が満載されていて、大変貴重なものでした。英語が得意で、世界の首脳が集まった軍縮会議でも通訳無しでやりとりが出来た斎藤さん。米山さんとも直接話をされた稀有な存在です。おそらく議事録は、斎

藤氏の海軍の後輩だった佐野常羽伯爵(ボーイスカウト活動の貢献で知られており、議事録にもボーイスカウトのコミッショナー(総裁)となられる旨の米山さんの挨拶文も入っています)が持ち帰ったものを頂いたのではないかと思います。この議事録では、徳川さんの演説への賛辞、参加した佐野伯爵の米山さんの配慮ある紹介等、往時の卓越したロータリアン達に会えたような気がしてとても嬉しかったです。また、第70地区は日本本土、台湾(Formosa)、南満州、朝鮮(Chosen)等とされていて、当時はKoreaというよりChosenと読む方が、グローバルでは常識だったのかもしれませんと思いました。これらは、当時の国政事情が垣間見られる記述でした。同行したナターシャ、マリッサさんは、懸命にテキサス北東部のロータリークラブの記述を捜し、何ク



80年以上前の資料を閲覧するナターシャさんとマリッサさん

ラブか見つけでは、大いに盛り上がっておりました。斎藤實記念館には、1927年の京城RCの手帳(会長は志賀潔=赤痢菌発見)も残されています。京城RCは、当時の朝鮮総督斎藤實氏と米山の意を受け東京RCの松岡正男、住井辰男の準備で1927年に設立されました。クラブ設立当時、斎藤氏は総督ではありませんでしたが、斎藤氏は京城クラブの名誉会員に



Through the active interest of His Excellency Makoto Saito, governor-general of Korea (Choson), a Rotary club has been organized in Keijo. The photograph was taken at the charter celebration dinner at which prominent Rotarians from Tokyo were present. The government and municipality were represented by Mr. K. Yusa, chief of administrative affairs for Korea, and the Mayor, Mr. S. Matsa. The membership of the Keijo Rotary Club included both Koreans and Japanese and speakers emphasized the opportunity that the new club afforded for closer relations in the end that their common ideals and aspirations may be blended into a common purpose.

京城 R C チャーターナイトの様子

なっていました。斎藤氏は時々、京城クラブへの例会に予告無し、秘書官を伴わずに出席されました。家族会には春子夫人と共に出席されることもあり、夫人はその度にロータリーマークの入った帯を締められていたそうです。記念館には、春子夫人が締めた帯も保存されています。斎藤氏は朝鮮総督をやめた後、1931年首相になりました。1933年の地区年次大会当時、総理大臣だった斎藤氏は、ロータリアンに首相官邸を提供し、お茶会を開催して下さいました。このことは、米山記念館発行の『超我の人 米山梅吉の聲音』(41ページ)にも記載されています。

昭和12年の国際ロータリー月報によると、斎藤氏はロータリーについてこんな風に語っていたそうです。「ロータリーの精神が立派な事は申すまでもないが、僕がロータリーを好きなのは、常例会に於けるビジネスの進行状態とその規律である。僅か一時間かそこらの短時間で、あれだけの能率を挙げる会は他にはあるまい。」松岡氏も「総督閣下と呼ぶには斎藤子爵は余りに親しみ深かった」「老総督御夫婦を中心とする京城クラブの家族会は、吾等会員の大なる誇りであった」と記録しています。

後日、今回の発見を再確認しに行ったところ、THE ROTARIANの1928~32年あたりのものも保存されているのを新たに発見しました。そこには、京城R Cのチャーターナイトの様子、斎藤閣下が「今月の誉れ」というコーナーで取り上げられていたり、第70区のガバナーとして米山梅吉氏が台北R Cを訪問している写真等が掲載されていました。今後、これらの資料を整理していくと、当時のロータリー活動の様子が垣間見えるような気がしました。



斎藤記念館に保管されていた THE ROTARIAN

長い間、書庫に眠っていたロータリーの議事録を、アメリカから来た短期留学生に発見されたことを、斎藤閣下も草葉の陰でさぞ喜びの事と、関係者一同深く感動した次第です。

「峠道」(和田家の人々)

秋葉澄子



私は、旧姓を和田と申しました。和田竹造は曾祖父に当たります。祖父は菊松と云ひ、竹造の次男、後の米山梅吉の次兄でござります。

明治五年竹造が亡くなりました後のこととなりますので、旧い話で恐縮致します。私が昭和十五年頃、南青山のお屋敷に、呼んで頂きました。米山梅吉氏と初めてお会いする事となりました。従姉兄達同年代の七、八名と一緒にございました。一番上が十歳位から私は五、六歳、学校に入学する前のことでした。

応接間に通され、立派な調度品、分厚い絨毯、重々しい雰囲気に圧倒されました。

「お行儀良くちゃんとしなければいけません」

と、それぞれ云はれてゐたのです。訪問客があるとの事で、大分長く待つてゐたと記憶してゐます。窓の外には青空と新緑が、見えていました。

少し時間があつて、梅吉氏が入つてゐらっしゃいました。とても威厳のある方でした。一人ずつ名前と年齢を聞き、しっかりと相対していただきました。

「頑張って勉強をして、一人前の大人になりなさい。」

と云う様な話を、囁んでふくめるように話して下さいました。ご活躍の様子は、かねがね聞かされてゐましたので、何か特別な時間が感じられました。それは、その眼の力のせいでいた様に思はれます。梅吉氏は七十代に入つてから病院生活を送りましたが、それでも病院生活のあった事など、思ひも及ばない子供達でした。そしてその眼は、始終柔軟な光をたたえてゐられました。

昭和十六年四月より、尋常小学校は、国民学校と名を変えました。東京の高田馬場にありました。私は、戸塚第二国民学校へ入学。十二月八日には第二次世界大戦が始まりました。翌年二日南仏、シンガポールまで侵攻。山本五十六大将が英國と調停いたしましたが、次第に戦況は不利になり、本土空襲が始まりました。

私は四日の昼過ぎ、敵機が早稲田に爆弾攻撃をす

るのを目撃致しました。行列で外に並んでいた時、黒いマークなしの飛行機からの射撃と爆弾投下の煙を見ました。死者も出たと聞きました。東京の空襲は、初めてでした。

昭和十九年、子供達の疎開が始まり、私の家族は静岡県沼津から三島へと移住致しました。三島大社の宮司であった日比谷家は、竹造氏の妻うたさん、その次男菊松氏の妻はつさんの実家でありました。

私は三島市立東国民学校の五年生になりました。当時、梅吉氏も下土狩の米山家へ疎開静養されて居りました。東京から離れたくないお気持ちもあったと伺っております。

一方、都会生まれの私は、なれない毎日の生活、言葉の不自由などございましたが、朝夕に見上げる富士山の姿に大変慰められました。富士山は手が届きそうな近さで、表情に富み、苦境にあって心強い応援団の様でした。後日、空襲する敵機は富士山を目標に飛び来て、山の近くで東京は東、大阪関西は西、と航路を決めたと知らされました。毎日空襲が続きました。

八月十五日は、三島大社の祭礼の日でした。早朝からの出店の準備を横目で見乍ら学校へ参りましたが、昼に重大な放送があると帰宅を促されました。祭りは中止になってみました。十二時、終戦の詔が放送されました。大変聞きとりにくい、天皇の声でございました。大人達は、敗戦と云うことだ、何がどうなるのかも分からぬ、と不安いっぱいございました。

國民の誰かは泣かぬものあらむ昭和二十と七八月
(はつき) 十五 (もうら) の日 (藍壺文藻より)

敗戦からの復興の苦難は、國民全体に多くの血と涙を課すものでした。戦後初の国会に登院した後、昭和二十一年四月米山梅吉氏他界。

老いかつ病みなやめる身はた吾が國の新しき歴史
見まもりてあらむ (藍壺文藻より)

昭和30年は、もはや戦後ではないと、経済成長期に入ります。昭和39年の東京オリンピックで飛躍的に近代化し続け、やがて平成の代となりました。

さて、昨年十二月、私事ですが、趣味の絵画クラブの忘年会の席で、ロータリークラブの会員の方と

ご一緒する機会がございました。その方は、現在ドイツからの留学生のお世話をなさっていらっしゃると伺いました。

帰宅して、以前母が残して参りました本『米山梅吉伝』(佐々木邦著)を再読致しました。梅吉氏が一人東京へ向け出立した旧東海道、箱根越えの道。徒走によつたものであった事。また、はからずもその道が、私の東国民学校の通学路にあたつていたこと。今の自分の年齢になって、初めて共感できる数々の事実がよく理解でき世界が広がりました。そして、図書館で谷内宏文先生の著書『点描 米山梅吉』と出会うことができました。その内容の詳細と、行き届いた文体に感動致しました。そして多くの方々のご支援があつてこの長い年月を引き継いで頂けましたこと、心より感謝するばかりでございます。

昭和二十年五月二十五日、空襲で南青山のお屋敷が燃焼しました同じ日、私共の裏に的場のあった、高田馬場の家も失いました。家族写真、家財、その他米山家の長男東一郎さん、次男駿二さんも十代のはつらつとした姿で遊びに立ち寄られた叔母達の思ひ出など、消滅してしまいました。



和田菊松

話をここで和田竹造の次男、菊松にふれます。亡くなりましたのが大正十一年九月、関東大震災の一年前で、生まれは慶應と思はれます。明治の戦役に加はった後、農務省の役人になったと聞いております。生前、漢学を修め漢詩をよくし新聞の選者(秋邨)を務めたとあります。勲六等瑞宝章が今も私達に残されて



和田菊松の家族
左から二人目 菊松の妻 はつ、右端 菊松の長女 大川花子

居ります。妻(はつ)は日比谷家より嫁ぎ(うたの姪に当たつた)、礼儀作法茶道華道と多くを学んだそうです。昭和三十年まで生存いたしました。主人を亡くして三十四年。長男(豊)は昭和二十一年、次男(実)は昭和二十年に帝国銀行の職場にて殉職。豊の妻静江は主人を亡くして五十八年。竹造の妻うたさんは三十七年を未亡人として、たくましく母と子で荒波を乗り切つて参りました。明治維新、関東大震災、第二次世界大戦と至難な時代でございました。

平成十七年一月、私の母和田静江をもちまして和田姓を名乗るものはなくなりました。しかし、血縁でしょうか。若い孫の中に三井信託の社員もあり、又何らかの繋がりを感じさせるものでございます。

現在和田竹造他一家の墓地は、東京台東区の徳川慶喜の墓地近く、臨濟宗の禪寺に祀つてございます。



東京台東区にある和田家のお墓

竹造 仲和院徳山淨隣居士

うた 繼和院賢箕慈恵大姉
菊松 秋邨採菊居士

菊松の漢詩を紹介いたします。竹造の故郷、高取のことを詠んだものです。

高取城有感

高取城荒餘碧山 亂雲呑吐澗聲聞
譙樓無復當年觀 杜宇啼過落照間

「秋邨詩鈔」より

次は、菊松が梅吉の海外での任務に思いを馳せた歌です。弟を思う心を披瀝したものです。菊松も中国大陆の広大さを身をもって知って居ります。

送梅聲散史赴海外

朔地如今似此鄰 鐵車千里涉煙津
鴨江西去多陳述 憑弔應吟哈爾賓
想復君爲征外客 一春離合入詩魂
歐煙米雨三千里 添得舊鴻新瓜痕

「秋邨詩鈔」より

最後になりましたが、米山梅吉氏の遺志を受け継いでくださる皆様に、深く御礼申し上げます。

「癩は天刑であり、天啓でもあった」

浜 悠人（沼津史談会副会長）

古来から不治の病とされていた癩病（ハンセン病）に理解を示し、光をあててくれた人を紹介したい。

①医師としてレプラ（癩病菌）を研究した木下塙太郎

②救癩事業に尽くされた貞明皇后

③癩患者として短歌を詠んだ明石海人

④療養所で治療にあたった林富美子

⑤癩病と誤診され、看護師として癩に一生を捧げた井深八重

⑥三井報恩会理事長として全国の療養施設の援助にあたった米山梅吉

木下塙太郎は、静岡県伊東市の「米惣」という雑貨問屋に明治18年に生まれた。本名、太田正雄で東大医学部を卒業後、フランスに留学。南洋医学堂、愛知医科大学、東北帝国大学、東京帝国大学教授を歴任した。彼の研究は皮膚糸状菌、レプラ（癩病菌）、皮膚腫瘍などに関するもので、その業績は国際的にも高く評価され、フランス政府から名誉勲章（レジオン・ドヌール）を受けた。とりわけ、昭和12年、東京帝国大学医学部教授となって皮膚科学講座を担当し、伝染病研究所（現東京大学医学研究所）の研究員をも兼ね、癩病の研究を進め、次第に世界的権威者と目されるようになった。詩人、劇作家としても名を馳せたが、本職は医学的立場から癩の研究に携わった人である。昭和20年癌で亡くなる。享年60歳。

貞明皇后は大正天皇のお后で、昭和天皇の生母にあたらせます。皇后は生前、沼津御用邸をたびたびお訪ねになり、御殿場線（当時は東海道線）で神山付近を通過される折りには復生病院の患者はその都度お見送りしたと伝えられます。皇后は救癩事業に尽くされたことで有名で、内務大臣安達謙蔵は、皇



木下塙太郎

後に救癩事業への援助を願い出て、昭和5年、御手元金248000円が下賜された。ハンナ・リデルの回春病院にも多額の寄付を行っており、また神山復生病院のレゼー神父が就任直後、病院経営が苦しくなった時にも経済援助をした。「つれづれの友となりてもなぐさめよゆきことかたきわれにかはりて」なる皇后の歌碑が全国の療養所に建立されている。

明石海人は、明治34年沼津で生まれ、本名野田勝太郎といい、ハンセン病（癩病）を患いながら「日本歌人」「日本詩壇」「文芸」「短歌研究」「水鏡」などに短歌を発表した。標題の「癩は天刑である。癩はまた天啓でもあった」は彼の短文の書き出しと結語からとったものである。昭和14年、ベストセラー歌集『白描』を発刊し、数ヶ月後、岡山の長島愛生園で亡くなる。享年39歳。ふるさと千本松原には、彼の歌碑が海人顕彰会によって建てられているので紹介する。

さくら花かつ散る今日の夕ぐれを
幾夜の底より鐘のなりくる
シルレア紀の地層は杳（とほ）きそのかみと
海の歎の我も棲みけむ
ゆくりなく映画に見ればふるさとの
海に十年の移ろいはなし



林 富美子*

林富美子は、ハンセン病の医師で多摩全生園、長島愛生園と昭和の初め頃、勤務していた。当時、前述の明石海人を患者として診ていたと思う。長島愛生園で医師の林文雄と結婚、二児の母となる。戦後、神山復生病院勤務。『野に咲くベロニカ』を著す。

井深八重は明治30年、台北市に生まれ、同志社英文科卒。長崎で英語教師となる。大正8年ハンセン病と診断され神山復生病院に入院。誤診とわかった

が、当時のレゼー院長の献身ぶりに接し、神父を助けることを決心。速成科の看護婦になり、退院したばかりの復生病院に就職。戦後の困難な時期を乗り切り、日本カトリック看護協会を設立。初代会長として貢献。平成元年、92歳で亡くなる。父は井深彦三郎。叔父は明治学院学院長だった井深梶之助。ソニーの創始者井深大は遠縁にあたる。



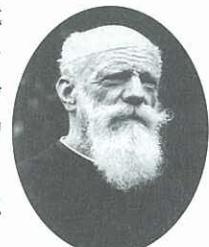
井深 八重*

国会議員の井深彦三郎。叔父は明治学院学院長だった井深梶之助。ソニーの創始者井深大は遠縁にあたる。米山梅吉は昭和9年、三井財閥による三井報恩会の初代理事長に就任した。時に66歳。実業界の第一線から引退した梅吉は、報恩会の福祉事業に専念した。その内の一つである療養施設の視察と慰問

を取り上げると、報恩会は癩病患者療養に数百万円を助成しただけでなく、米山梅吉自身が病の身ながら、北は青森、南は沖縄と全国に渡り視察、慰問を実行している。昭和15年5月、琉球國頭愛樂園、長崎愛生園、香川讚岐大島療養所、岡山邑久光明園、10月は熊本菊池恵楓園、鹿児島大隅敬愛所、昭和17年5月、福島療養所、岩手療養所、青森松丘園、宮城東北新生園、新潟療養所、長野療養所、武藏多摩全生園、7月は草津樂泉園を訪問している。なお、各地に放浪していた患者収容のため三千床のベッドを寄贈、全国13ヶ所の国立療養所の整備に寄与した。

付記 1943年のプロミンに始まる科学療法剤の効果によって不治の病、癩病も今日では確実に治癒されることになった。

復生病院と三井報恩会



レゼー神父*

大正7年に復生病院院長に就任したドルワール・ド・レゼー神父は、就任時70歳という高齢の身でありながら献身的な活動を13年間にわたって行った。レゼー神父は、独学独考、独創獨行の人であったという。また、道徳的、精神的にも潔癖でユニークな人であったらしい。その昔「富士の雪どけ水で身を洗えば、らいは清くなる」という言い伝えがあったという。この辺りは富士山の岩盤の上にあり、井戸を掘るのが難しかった。しかし、レゼー神父は病院の環境整備のために水を得ようと、井戸を掘った。また、静岡県知事を通じて内務大臣に意見書も提出している。このようなレゼー神父の行動に、様々な形で援助の手が差し伸べられた。「復生病院同情会」は目賀田男爵夫人らが始めた会で、チャリティー音楽会等で資金集めをした。レゼー神父は、物心面だけでなく医療そのものにも力を入れた。治らい薬とう新しい薬を試みたり（これはすぐにインチキ薬と判明した）、外国の新聞や雑誌に新薬や治癒記事を見つけると、すぐに外務大臣宛にその調査の依頼もした。なんといっても医師の不足は否めなかったが、地元御殿場のとある医師一族は、一代目は馬に乗り、

二代目は人力車で、三代目は車で、と代々継続しての献身的な治療にあたった。

貞明皇后様は、特にらい患者への援助に力をいれ、全国各地の療養所を慰問された。大正9年、沼津御用邸から直接静岡県知事に復生病院について御下問され、金一封を賜った。これが後に復生病院後援会設立のきっかけとなった。大正13年には、御用邸にお越しの際、金一封と共に患者さん各自に縞布地一反と裏地一反を下賜し、その反物を沼津高女（現沼津西高校）の生徒が着物に仕立て、一同に贈られた。

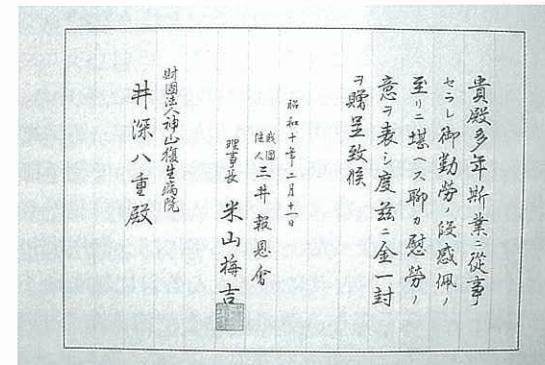
29年間入院生活を送り74歳で亡くなった患者さんの一人は、「この着物で埋葬してほしい」というほど感激したという。患者さんたちは、このような度重なるお心に感謝の意を表したいと思った。皇后様がお通りになる昭和8年6月7日、患者さんの代表は、朝お風呂に入つて身を清め、一張羅に身を包み黄瀬川の河原



復生病院敷地内の「つれづれの一」碑

に立ち、皇后様の乗る列車をお見送りした。皇后様も黄瀬川が近づくと列車の窓際に立ち、この心に応えた。一同は列車が通り過ぎると、感極まって抱き合って涙を流したという。昭和32年には、お召列車奉送を記念して、黄瀬川の河原に奉拝碑も建立された。全国の療養所には貞明皇后様の「つれづれの～」の歌碑が建立されている。神山にある歌碑は入江為守侍従長の揮毫によるものである。奉拝碑と貞明皇后様の歌碑は、現在、復生病院の敷地内に移設されている。

今、新島八重と並びもう一人の八重として静かな脚光を浴びるのが井深八重である。井深八重は大正8年に復生病院に入院した。後に誤診であると診断されたが、レゼー神父の献身的な姿に心を打たれ、ここに残ることを決意。大正13年、復生病院初の専任の看護婦として就任した。そして12人の院長に選ばれた。この功績を称えて、昭和10年2月、三井報恩会より優良社会事業従事者として感謝状と金一封を授与されている。ソニーの創始者井深大は遠縁にあたるが、ソニーから寄附されたトランジスターラジオは、今でも防災用として大事に保管されている。



三井報恩会から井深八重に送られた感謝状（復生記念館蔵）

昭和5年、院長に就任した岩下壮一は、東大卒のエリートであった。ゆくゆくは東大教授を嘱望された身であったが、文部省在外研究留学生としてパリに渡り、ヨーロッパ各地を転々とするうちに、父親に手紙を送った。「自分はこれまで学問の道を歩いてきたが、今後は精神界に身を委ね、思想の導に微力を捧げたい。」という内容のものであった。これに対し父は「大いによろしい。それなら、日本にはライ患者が多い。この方面に尽せ」と返事をしている。壮一の父岩下清周は1857年の生まれで、1878



岩下壮一*



昭和28年頃の診療所の案内板**

年に三井物産に入社した。1893年には三井銀行の本店副支配人を務めている。1897年（明治30）に北浜銀行設立のため、三井を離れる。米山とは11歳年長であり、米山が三井銀行に入行したときにはすでに清周は三井を離れているので、会社の中で会うことはなかったと思うが、「10歩先を行く人」といわれた清周のことを先輩の話として噂を聞いていたかもしれない。父親のアドバイスに「尽せるだけ尽します。」と返事を書いた壮一は、その言葉通り、全身全霊でその職にあたった。五ヵ年計画をたて、常勤の医師を招聘し、水洗便所や消毒整備、下水道の処理など衛生管理の整理をした。また、病院の増改築や設備改善だけでなく、患者の子供や他の療養所から来た子供の世話をしたり、運動場を整備し野球を導入するなど、精神衛生の面でも様々な改革を行った。我が子の進む道を後押しした父清周は、大口の寄附という形で、息子の活躍を陰ながら応援した。

この岩下壮一と井深八重に乞われて専任医師として大島青松園より就任したのが、林富美子であった。林は、岩下、井深両氏から別々に復生病院への招聘を受けていたが、信頼のおけるご両人が声をかけてくれるのであれば、と決心したのであった。昭和26年のクリスマス前のことであった。同じ医師の夫文雄を亡くし、子供二人を連れての移住であった。子供達が転校する中学校が米軍基地内にあり、その校舎も旧軍隊の建物だったことは、こちらに来てからわかったことだった。当時、米軍と近くの生活は富美子には「異様な街並み」に映り母子の家庭としては不安を覚えた。事前にわかっていたら断ったであろうが、岩下と井深に導かれたこともあり、この地で治療に専念することを決意する。幸い米軍キャンプからの支援は、物資に止まらずペンキ塗りや道路工事まで及んだ。豊富な米軍からの支援物資である医薬品を、疲弊していた地域の人にも活用しようと、

昭和27年（1952）に聖マリア診療所を開設した。当初、富美子は「自分はらい患者の治療にきたのであって、村人のための診療所開設は反対である」と主張したが、午前はらい患者の診療、午後は村人の診療にあたり、米軍からの支援物資の医薬品を広く世の人のために活用した。現在、林のご長男で内科医の林真氏が復生病院で勤務されている。

三井報恩会は、設立当初から復生病院への援助を行っている。10年間の寄付詳細は以下の表の通りである。

支給月	助成額(円)	助成内容
昭和10年2月	400	昭和9年度経費に対する助成金
昭和10年12月	500	昭和10年度経費に対する助成金
昭和11年12月	500	昭和11年度経費に対する助成金
昭和12年12月	1,000	昭和12年度経費に対する助成金
昭和13年12月	1,000	昭和13年度経費に対する助成金
昭和14年12月	1,000	昭和14年度経費に対する助成金
	1,000	申請したと思われる書類あり
	1,000	申請したと思われる書類あり
昭和17年12月	1,000	昭和17年度経費に対する助成金
昭和18年12月	1,000	昭和18年度経費に対する助成金
昭和19年4月	(400)	セファランチン1年間投与分
昭和19年12月	1,000	昭和19年度経費に対する助成金

注)・昭和15,16年は、支給月を示す資料が残っていないが、支給されている

・昭和19年4月は現物寄付（）円は予算額

三井報恩会の救療事業は、政府を援助してベッド数三千床の増床だけでなく、復生病院のような私設療養所の経費補助、患者相談所の設置、井深八重のような療養所職員の表彰、患者の慰安事業など多岐に亘った。

米山は昭和15から17年にかけて、三井報恩会理事長として、全国の療養所に手みやげを持って患者さん達を慰問している。この時のお土産は全て自分のポケットマネーによって賄われ、旅先の旅館での心付けなども自費で負担したという。

米山自身、報恩会の活動には熱心で、毎日のように事務所に顔を出し、活動状況を確認したり、訪問者と面会した。理想家肌の米山の姿勢は、正義に徹し、筋を通すことを重んじ、情実に促されないものであったという。

米山は各地の療養所を視察する中で、いくつかの短歌も詠んでいる。熊本では回春病院を作ったりデル女史の足跡を辿り、詩も残している。

リデル女史の跡を訪ひて

面をかくし 哀別の門出 名をひめて 巡礼の旅 海こそは 流しし涙 山こそは 積もりし恨 いれもせめ 収めもすらめ 人は目をそむけてを行き 世は手をし 延べがてに過ぐ 外国の女人ありけり 神かけてこれの救ひに 一生(ひとよ)を 捧げんぬ 人あまた やすらかにゆかしめ きよまれる しるしと共に みとりつる 尊き人の

かたみとして 残れる御堂 その前に 立ちてぞ思ふ 雲の上ゆ 光直さし 九重ゆおほみ歌賜ふ み心を いためたまふこと古へも 今も畏し み民われら これの助けに 力あはせ 立たざらめやは その一生をささげし人に むくゆべく 立たざらめやは ををしくも 世に咲き匂ふ 大和心もて

「復生」とはResurrection、キリストの復活を意味する。ここには病の苦しみからの解放、そして生命や希望の再生を願う多くの先人の思いが溢れている。

1897年に司祭館として建てられた建物は、寄棟造りのコロニアルスタイルの洋館で、長らく病院の本部事務所として利用してきた。ここが2004年に復生記念館となり、復生病院の創立以来の資料を保存し、展示を行ってきた。年間1000人を超える人がここを訪れて、ハンセン病に対する理解を深め、差別や偏見に負けず生活をしてきた入院患者さんたちの姿を学んできた。現在、100年以上の時を経て、建物の老朽化も進み、保存に耐えないということで建設当時の形への復元の準備が進められている。



建設当時の洋館

参考資料『神山復生病院の100年』

本稿※の写真は『神山復生病院の120年歩み』より
本稿執筆にあたっては、復生記念館の森下裕子さんに多大なるご協力をいただきました。この場をかりて深く感謝申し上げます。

米山梅吉記念館秋季例祭

お知らせ

日 時 平成25年9月14日（土） 午後2時～

場 所 米山梅吉記念館ホール

新幹線三島駅よりタクシー5分

内 容 例 祭

講 演 [講師] 井上輝夫 氏 (前富士山資料館長)

[演題] 「世界遺産富士山の歴史（仮）」

アトラクション

懇親会 講演者、参加者と一緒に懇親 登録料無料

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

米山梅吉記念館のご案内



● 開館時間 ●

午前10時～午後4時

● 休館日 ●

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 22

発行日 平成25年8月10日
発行者 公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp

印 刷 フタバ印刷株式会社